

救助隊活動報告

1. 関東ブロック救助隊合同訓練

平成 31 年 2 月 23・24 日開催。東京都連盟主管。

救助隊より 5 名参加。土合山の家及びその裏手の山の斜面にて実施しました。初日は、要救助者の梱包について、都連盟より実演がされました。これまでとはやや違った、新しい方式との事で紹介されました。その実際を、まずは写真にて見て頂きます。



梱包は、ブルーシートを使用。



要救助者の足首廻りを、クローブヒッチと、オーバーハンドノットで固定。ロープは充分に余長を取って、振り分ける。



この振り分けたロープが、先導者が引くロープとなる。



梱包シートの前を裕せて、クローブヒッチで締める。締め上げたロープを、スケッドに固定し、メインロープに結束する形にする。ここでは、流動分散にしている。



正直、分かり易い方式ではなかったです。要救助者の足首を固定する段階で既にやり難いです。十分な余長をとってから結ぶのも、クローブが足首と足の甲の辺りで結び目が二つに分かれるのもやりにくく、取り入れたいやり方とは思えませんでした。また、頭部側で、メインロープと結束をするやり方も、もっとシンプルにしても良いのではないかと感じられました。しかしながら、神奈川県連では、ではここでどの様なやり方をするのか、と言われても、この時点では特に方式を確立していませんでした。我々が実際の現場でスケッドを使用する事が起こりえず、そのためここ数年の間は、訓練でも使っていませんでした。とは言え、やはり救助隊である以上は、しっかりとした方式を決めておくべきであろうと反省するに至りました。梱包には、通常ツェルトを使用しています。これは、我々一般登山者が対処するコンパニオンレスキューにおいても、使う事があり得ます。スケッドの使用は極めて特殊な状況ですが、その前の段階のツェルト梱包までは習得すべき技術ですので、後はその応用となります。ここまでの流れをシンプルに整理すれば神奈川方式としてまとめられると考えました。この点は、次回3月の訓練で実施する事にしました。



24日、雪崩捜索と搬出訓練を実施しました。どう上手くセッティングされたのか、我々の班の捜索対象のビーコンがなかなか捉えられず、ターゲットの発見までに相当の時間を要してしまいました。他の班のビーコンは感知しているながら、自分達のターゲットが捕まえられませんでした。また、他の班の隊員のビーコンが、自動復帰してしまい、これにも相当惑わされました。しかも、自動復帰している機械の携行者がそれを自覚していないのも問題でした。

かなりの苛立ちの末、ようやくターゲットを発見、梱包から、引き降ろしに入ります。ここで、いくつかの反省点を確認できました。要救助者に結束しているメインロープのテンションが、直接要救助者に伝わってしまい、かなり痛い思いをさせてしまった事。バックアップロープを2本にした事で、手返しが悪く、操作や支点の構築に余計な手間となり、時間が掛かってしまった事。そもそも梱包のやり方をしっかりと確立していないので、時間が掛かると、ロープが要救助者の顔に当たる等の支障が生じた事等です。これらの反省を踏まえて、次回3月の訓練に臨む事としました。

2. 雪崩搜索救助訓練

平成31年3月16・17日に、昨年に引き続き、かぐらみつまたスキー場において、スキー場のご協力を頂いた中で、今年も雪崩搜索救助訓練を実施しました。救助隊より6名、遭難対策部より1名、一般会員2名、計9名の参加で行いました。初日は、ロープウェイ山頂駅より、少し下った斜面を使わせて頂き、搜索訓練を行いました。

ビーコン搜索、プロービング、掘り出しまで一連の流れを訓練しました。前回の、関東ブロックでの訓練では、ビーコンの自動復帰の問題がありましたが、今回は、スイッチの不具合で、サーチモードに切り替えているにも拘らず、センドモードになったままとなり、搜索に支障を来した事象がありました。やはり、実際に訓練してみないと、起こり得る問題点を知る事ができません。これが実際の現場であったら、極めて大きな問題となってしまいます。日頃の訓練の大切さを思い知らされました。

春の湿った思い雪でしたので、掘り出しはなかなか大変でした。ダミーも等身大の物を使用したので、実際に人を掘り出すのがいかに大変かを、実感する事ができました。プローブがヒットして、ではどこから掘り始めるのか。要救助者を確保するためのプラットホームの構築がいかに大切か。いきなり真上から掘り始めるのは、却って掘り出しが難しくなり、また、その次の段階への移行が難しくなります。雪崩救助訓練の主眼は、この点にあります。



宿へ戻り、テキストの読み合わせをしつつ、前回の関東ブロックでの反省点を踏まえて、梱包とロープの結束の方式を確認しました。

翌24日、梱包訓練を実施しました。前日、室内で確認した内容を、野外で実際に行います。搬送する側、される側が、実際にどのような状況になるか、体験する事が大切です。

また、今回はヒトココの搜索訓練も行いました。現在親機の販売はされておらず、レンタルのみとなっていますが、救助隊では親機を3台装備品として所持しております。ココヘリの会員となっている連盟員の方がおられますが、まだまだ普及は少ないです。(昨年末時点で66名)。救助隊が地上搜索部隊で出動する事もできますので、まだ入会されていない方は、ご検討頂けるとよろしいかと考えます。労山特別枠は、まだ

残っています。





ツェルト担架の作成。端から巻き込むのではなく、折り返して畳み代を重ねた方が持ち易い。

以下に、今回参加された一般連盟員の方からの感想を紹介します。

やま++ (男性)

先週末は大変お世話になりました。貴重な体験をさせて頂き、自分の勉強不足を痛感しました。これを機に、精進に努めます。参加者の方々のお話を伺うと、うちの会はいろいろな意味で大人し過ぎると思いました。会員数が少ないこともありますが、もっと山行数を増やさねばと思います。今後も機会がありましたら、県連の行事に参加したいと思います。よろしく願いいたします。

藤沢山の会 (女性)

湯沢では色々と知識と愛情と体力をふんだんと注いで頂きありがとうございました。ビーコンの使い方などの実体験は凄く刺激を受けました。また搬送される人になり皆さんの作業に身を預けてみて、感じるがありました。決して怪我人にはなりたく無い。なってはいけません。一人が搬送されるのには、ロープやツェルト、カラビナ、もしかりですが、搬送には6人もの人を要します。その現場を考えると強く感じました。参加させて頂き計画と実践をしていただいた救助隊の皆様や諸先輩に感謝します。